

## 幼児絵本の評価をめぐる（続）

### 二、「総合良書リスト」※による諸考察

#### 一、絵本の「教育性」について

「児童文学」とは何かについて、未だなお十分な定義はなされていない。特に「絵本」については、絵と文の関係において一層カオスの状態があると言えよう。

果して、児童文学は独立したジャンルを構成するのだろうか？ まして、絵本は一つの特定ジャンルとして認めるのかどうか？ 読者の年齢段階だけでそれを特定することは無意味であろう。それは、著作者の国籍による日本文学や西洋文学が意味を持たないのと同様である。しかし、「日本」といい、「西洋」という言葉が、文学的特性を含み持つものと捉えられれば、何がしかの意味が現れてくる。「児童」という言葉は文学対象として何か特別の要請をもつものであろうか？ 主題・内容・素材・手法に何か特殊な有り様を求めるものなのだろうか？ つまり、児童が人格形成途上にあるという理由で、一般文学に求められない「教育性」が、「芸術性」の他に必須のものなのかどうか、という問題である。また、特に低年齢児童に対して——したがって、特に絵

本において——その発達水準から、「思想性」はどうなるのか、ということである。前回触れたように、この点に関して絵本に求められる特性は、一般にはせいぜいのところ、独創性、想像性、生活性などであり、「おもしろく、はつきり、わかりやすい」本が評価されるのであった。

ところで、従来、子ども向きの本は、主として教育的意図を持つべきものとして捉えられてきた。したがって、漫画は娯楽性にのみ偏るものとして、また恋愛物語は年齢にそぐわないものとして忌避され、時々社会主義に反する思想のもの、特に反社会的ないしは暗い結末に終るものは不健全なものとして遠ざけられてきた。つまり、そこで期待された「教育性」は、一つには発達および成熟度を考慮すべきであるという考えであり、二つには人格形成上、社会秩序に従った何がしかの積極的教育効果をもつ素材であるべきだという考えであった。

戦後児童文学の歴史は、絵本の場合を含めて、このような防衛的姿勢からの開放の過程であったと言える。このことは多かれ少なかれ各種良書リストの中にも明白にうかがえるところである。たとえば、

理解力に関して、表現上、方言や語句の難しさについても、作品全体の内容把握の可能性において許容範囲が拡げられている。『八郎』などがその例であり、絵については一層歴然と童画の範囲を脱して感性に訴えるものとなってきた。また、内容上も、たとえば『しろいうさぎとくろいうさぎ』など異性愛を暗示するものが、自然の人間性にもとづくものとして評価され、『はなのすきなうし』に見られるような、生き方や平和思想を暗々裡に語るものが注目されるようになっていく。それらは明らかに道徳的な教訓を意図したものとは種を異にしているものである。

一方、教育効果を直接ねらった、知識・技能など能力向上に関する絵本は、いわゆる知識絵本・生活絵本の豊富化にも助けられて、それが絵本本来の意味とは考えられることが少なくなった。したがって、『総合良書リスト』中では、『あいうえおの本』『ことばあそびうた』『かわ』などが顔を出すにとどまっている。そしてむしろ、知識絵本・生活絵本が物語性を含むことによってその区分にこだわりなく注目され始めていると言えよう。上記の『かわ』がそれであり、生活絵本では『はけたよはけたよ』などがそれである。

ここには、従前と異なる児童観・教育観・文学観がある。しかしそれでも、一般に、人の愛や行動の動機づけに資するもの、感情にうるおいを持たせるものを主題ないしは素材としているものが評価されており、暗鬱な素材は極力避けられ、反道徳的なストーリーは子ども達の正義感が対応できる範囲にあるものと、結末での発展的解決につながるもののみが評価されていると言ってよい。「総合良書リスト」中

の本はすべて、そのような広く認識や想像力の自然の向上に意味あるものが取り上げられていると言えるだろう。したがって、児童文学や絵本における教育性は、意識するとしなにかかわらず、大人の側の配慮のしるしとしてなお維持され続けていることを否定できない。

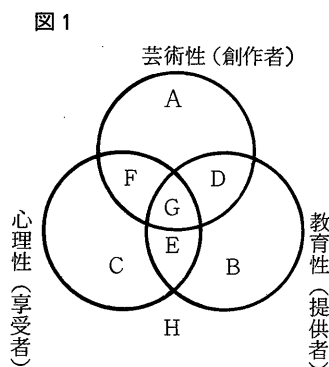
私見では、真に芸術性豊かなものは、そのまま教育性をも含みつものと考ええる。両者は究極においては決して矛盾するものではなく、むしろ一体のものであろう。たとえば、マッシュ・アーノルドを借りる迄もなく、文学は「人生の批評」の面を持ち、人間を問い、人生を問題とする。また、芸術的価値を意味する美は、広く人間の感性をゆるがして人間の人間たる所以を形づくるものである。それは人間形成の原点にかかわるものとも言えよう。また、よしんば、或作品が美よりむしろ、社会と人間の悪や不安を素材とし、主題とする場合も、たとえば、グレアム・グリーンがそうであるように、逆の面から人間や人生を問うていると言えるであろう。その限りでそれは単なる暴露的自慰ではなくして、教育性を秘めていることを否定できない。

視点を変えれば、逆も亦真であって、教育それ自体が本来の意味において人間の理想を追求し、その実現へと導びく芸術に他ならないことは、その創造性において、また、現実の日々の努力の形態において間違いないと言えるであろう。児童文学や絵本が、児童対象という意味で、児童そのものの直観能力や純粹の感性を一応認めながらも、同時に、心理的・知的・生活的能力の発達段階を考慮することは無意味ではない。制限的意味においてでなく、より「出遇い」の意味を高めるものとして、条件考慮は、それを強制するものでない限り、むしろ、提供内容とし

て留意されてよいものである。

「教育性」とは、より具体的に言えば、上述の発達段階を基礎に、内容上の生活性（社会性）、情操性、思想性、創造性など、そして表現上の明快性、美感性、応答性など、既に人々に言及されている表現（前出）を一部借りて言うて良いものだろう。なお、結論的に言えば、芸術性と教育性とは、児童文学、特に主たる対象が幼年児童である絵本においては、当の受け手の子ども達の「心理性」と合わせて、次のように、ほぼ図式化されよう（図1）。つまり、先回表八で示した大人と子どもの評価上のずれ（後述もする）を注目する時、児童文学の水準を判定するものとして、「芸術性」「教育性」に「心理性」を併せ考えなければ正しくないと思われる。「心理性」とは、より具体的に言えば、興味性、想像性、娯楽性、共感性、充足性などの意味である。

したがって、比喩的に言えば、「創る人（創作者）」「読む人・備える人（提供者）」「楽しむ人（享受者）」という三者の関係交錯の中で、



A、B、C、D、E、F、G、Hの類型が見出されることになるだろう。A、BおよびCは、それぞれその本質に関して特に際立つものであり、D、E、Fは相互に重合する価値が見られるもの、そしてGは三者を併せて最も望ましい水準に達したものと言える。もちろん、A、B、Cは、その有

り様でそれぞれの独自の作品的価値を持つものであり、交錯の度合だけでは必ずしも判定できない。そして、前回も留意したように、特に享受者個々によってその意味は異なるものである。なお、Hは全く評価に値しないものを意味する。

一般に、提供者たる大人、たとえば、親・教師・司書はA、Bの視点、つまり主としてDで評価し、享受者の子どもはむしろC、Aの視点、つまりFの点で判断すると言えるだろう。また、B、Cの視点、つまりEに関しては、提供者・享受者が相互に合致することも多いだろう。しかし、芸術性（A）に欠ける時、文学としては不十分であり、その意味で、重合水準のD、E、Fは、価値的には、F、D、Eの順になるものと言ふべきだろう。なお、既にクラシックとして認定されるもの（前出）の多くは、Gに該当するものと言つてよい。

## 二、絵本における絵と文

絵本の場合、次に「絵」と「文」の関係をどう捉えるかが問題となる。つまり、絵本作成に関して、文章担当の作家が主体か、絵を描く画家が主体か、という点、および両者の関係である。従来の動向では、絵本とは、まず主体に文があつて、それに挿絵として絵がつけられるものを意味していた。その典型が昔話絵本である。また、童話においても、文章量と対比して、絵は当然挿絵にとどまらざるを得ないものである。それらでは、作家の側から画家に対してイメージが伝えられるか、あるいは画家がストーリーの意向を汲みとつて、絵を説明的に描

くのが普通であった。市販絵本の多くのものがこの形態をとっていると言つてよいだろう。しかし、次第に、これに対する疑問が、主として外国絵本の例（後述）から意識され、やがて絵が主体であつてこそ「絵本」であるという見解が示されるようになってきた。したがつて、具体的には、何らかの形で作家と画家の両者が十分合意した結果産み出されたものが良い絵本であると評価されるようになっていく。後述のように、それは或時は食うか食われるかの両者の戦いの中で、或時は作曲家と演奏家に喻えられる協演の中で産み出されるべきものとされるようになった。こうして、時には或種のコンビが人脈において、あるいは物語に合った画風という形でできあがつてきており、それらの例を「総合良書リスト」中にとりあげることはむしろ容易なことと言つてよい。そして今、表紙の著作者名表記において、画家の名前が先行する場合が見られるようになってきている。

この流れの中で四つの傾向が取り出される。第一は、「作」と「画」が同一者である場合が出て来たことであり、第二の傾向は「文字なし」絵本が生み出されてきたことである。また、第三に「写真」絵本が出現し、さらに第四に、この流れ、つまり美術的水準の向上の中で、「アダルト」絵本が現われてきたことである。

第一の動向、つまり作・画同一者の場合は特に翻訳絵本に目立っている。「総合良書リスト」中の翻訳絵本七七冊中、実に四六冊、五九・七％が同一者であり、第一段階二八冊だけを取り出せば、同一者のすべて一三冊が翻訳絵本となっている。このことは、良い絵本と言われるものの一つの条件を示唆するものでもあった。なお「総合良書リ

スト」における同一者状況は表九の通りである。明らかに全体としても意外に多く、四六・九％を占め、日本人の場合も、本邦絵本の三一・八％がそれに当り、決して少なくないことがわかる。

しかし、画家のすべてが、同時に物語作家としても十分な能力を持つわけではない。画家の言語的・文学的創作能力が、同じ芸術家というだけで常にしかるべく伴うものではない。最大の違いは、絵画が形体及び色彩の特定の技術を伴った静的空間的表現芸術であるということである。もちろん、一枚の絵・

表 9 文・画同一者絵本数

段階	文・画同一者絵本数	付) ( ) 内日本人内数及その氏名・作品数
I	13 ( 0 )	加古里子 2, 赤羽末吉 1, 岩波書店編集部 1 馬場のぼる 1, 佐藤さとる 1, 西巻かや子 1, 長谷川集平 1 ヤシマタロウ 1, 藪内 一 1, 寺島竜一 1, 小野木学 1, 田島征三 2 安野光雅 2, 谷内こうた 1, うえののりこ 1, さのようこ 1, 姉崎一馬 1
II	10 ( 4 )	
III	16 ( 4 )	
IV	11 ( 6 )	
V	17 ( 6 )	
計	67冊 (21冊)	

註) 全体に占める文・画同一者絵本比 46.9% 本邦絵本中の文・画同一者絵本比 31.8%  
文・画同一者絵本における日本人比 31.3% 翻訳絵本中の文・画同一者絵本比 59.7%

タブローの中にも時間が暗示され、動的物語がこめられることもあり、鑑賞の中でそれらが把握されることもあろう。あるいは絵本の最大傑作はそうした一枚の絵であるかもしれない。しかし一般には、絵が連続しあるいはページがめくられる中で物語が展開するものが絵本である。

そうだとすれば、物語自体にも芸術性が高く求められるわけであって、この両者を的確に表現しうる画家はそう多くは存在しない。逆もまた真であり、作家が絵に習熟することももちろん難しい。ただ、物語作成段階で、種々な形で脳裡に表われるイメージが確実なものであれば、子どもに訴える絵が多少稚拙であっても描かれうるだろう。というのは、イメージの可能性はストーリーや言葉に比して非常に広く多様だからである。つまり、文は確かな展開や因果のつじつまが合わなければ、ストーリー自体が始まらないのに対し、絵はいろいろな造形が可能だからである。事実、作家が文およびストーリーを作成するだけの場合も、具象的イメージが自分の中になければ、子ども達に共感を呼ぶ具体的描写もなしえず、画家との談合も不可能であろう。

それでは、画家と作家との協議はどのような作用において行なわれるべきだろうか？ 児童文学界の発言には、要約すれば、①絵本は絵を見ただけでストーリーが追えるものでなければならぬ、という見解から、②絵において欠ける所を文が補い、文において欠ける所を絵が補なうものであるべき、とするもの、③絵が文のイメージをしつかりと組み立て発展させるものであるべき、と考えるもの、また逆に、④絵が文を限定しすぎては問題がある、とするもの等々、それぞれ若干ニュアンスを違えつつ多様である。絵と文の関係を、補助・相互補充

・融合・協合・相乗の効果などの立場で捉えるものから、止揚という語を使用するものまで多様である。

それは、たとえば、オーケストラの交響楽演奏に比されたり、さらに逆上って、作曲家と演奏家との関係に比されたりもする。つまり、これらの比喻は、分析すれば、個々ないしは相互の自己主張、拮抗、そして共鳴という形でも捉えられよう。単なる調和だけではない。それは演劇における主役と相手役の関係にも比されうる。互にその役所を殺すか殺されるかの併呑の危機、丁丁発止と渡り合う部分があつて、初めて芸術の域に高まるものと考えられる。それは、一方が他方に従ったり、馴れ合ったりするものでは恐らくない。それでこそ、止揚・正・反・合の弁証法的展開が用語化されうるわけである。よい絵本は、その拮抗の質の高さ厳しさから生まれるものと考えられよう。したがって、一般に調和に価値感をもつ我国の世界観に、主客逆転の可能性をもつ拮抗こそ当為とする考え方が定着した時、一段と強力な絵本の発展が見られるように思われる。

画家の絵本作成に対する意識の変革は、注目すべき展開を生んだ。画家の想像性および創造性の発展として、既述のような第二の傾向、つまり、文章なき絵本、ないしは極端に簡潔化され短文化された文章の絵本を生み出したことである。それらは、ストーリーが有って、しかも無い。あるいはストーリーが無くて有る。したがって、そのストーリーは絵を読む読者の主体性ないしは主観その他の条件で変わることとなる。たとえば、文字の読めない子どもが、描かれた絵を通して自分の想像力で作成した物語は、いかに優れた一人の作家ないしは

画家、あるいは画家・作家の絶妙のコンビによって創作された絵本であっても、結果として異なるストーリーになることが自然に起こるからである。その意味で、文字なし絵本はこれからの絵本にとって、その性格や質を左右する重要な試金石となるものであろう。

こうした発展の中で、第三の傾向として、視覚的表現芸術にかかわる写真家が絵本に参加してくることはむしろ当然の成行であった。ところで、写真絵本は、物語のための対象素材が、描画による場合に比較して明確な制限を課すものである。対象が自然や動物や人間である時、人工的操作はかなり制限され、多くの場合、場面一つ一つの構成は偶然に頼らざるをえないであろう。しかもそれは長期にわたる真剣な創作活動が必要とする。リスト中の『はるにれ』がその一例である。しかし、写真に対する子ども達の感受性は豊かであり、理解力も想像力もそれに伴うこと、また写真の生み出す芸術的特性が心理的充足に有意義であること、などから、やはり、写真絵本は絵本表現に今後無視できぬものとなるであろう。特に写真のモンタージュ手法の採用により、より複雑多様な場面を構成して、それは今後の絵本史を豊かなものにしていくだろう。

絵本の絵が挿絵でなく芸術性高いものとなり、その手段に写真が加わってくると、読者対象が拡大し、第四の傾向として、大人の絵本が生まれてくる。画集ないしは写真集、特にセット写真の発展がそれである。「総合良書リスト」中には対象者の年齢段階上、これらの絵本は含まれていないが、この展開は、やがて逆に幼児絵本に種々の影響をもたらすことになるだろう。

### 三、絵本主題の「思想性」

「教育性」に関する論議と並んで、児童文学、特に絵本の場合「思想性」の問題が上がってくる。つまり、絵本というものが単なる物語展開の面白さだけで良いかどうかという問題である。そこに、人間や人生を問い、社会や世界を問う思想がなければ文学ではないという考え方である。それは、思想なるものを正面切って直接説く必要を促すものではないが、一冊の絵本として創作することを促す内的問題意識ないしは表現意欲があつて、初めて芸術性がにじみ出てくるとする考え方である。むろん、芸術は絵画であれ、音楽であれ、演劇であれ、その本質をなす美的価値を越えた思想・世界観を必然のものとするという考え方を誰も否定しない。したがって、読者をして識らず感動させ思考させる何か、読者の変革に迫る何か、それを持たない文学は、たとえ幼児が対象であれ、芸術の名に値しないと考えるのである。

既に見たとおり、教育性はここに一つの重要な基盤を置く。教育性の意味は思想性の有無とその質の高さ如何にかかっている。したがって、芸術性は教育性と一致するものでもあった。では、幼児において、いかなる思想性が理解可能であり、望ましいものであろうか？　いうまでもなく、人間の生き様の本質にかかわるものが成人の場合と同様に当たるだろう。その第一は、心に感動を呼ぶ愛の思想であり、第二に、共感を呼ぶ人間の主体的行動、特に労働の思想であろう。人間は、誕生の瞬間から誰か人の愛がなければ、生命の維持が困難な状況

にあり、本性的に愛を期待して生まれてくるものである。したがって逆に、愛の中にのみ自らの基本的な充足をうることができる存在である。また、人間は、労働なくして生存を続けることが不可能な存在である。誕生も授乳もすべて愛に由来する労働であつたし、人間の一手一投足、一つの思考、一つの祈、すべて労働ならざるはない。特に幼児にとっては、愛は受動・能動の両面において日常の基本的体験事項であり、労働は広義において彼自身の活動そのものである。その意味で愛と労働は、最も身近に、かつ直感的に幼児が思想の根底として捉えることができるものである。しかも、愛は労働を通して成就する表裏一体のものであり、したがって、悲しみや苦痛、汚濁や弱さといった欠如が生む悪や暗黒も、愛と労働の意味自体を強化して物語の素材たりうるものと言ってよい。愛の悲しみを知り、額に汗する労働の中でより高い価値への昇華がより明確に体感されるからである。『おおかみと七ひきの子やぎ』や『三びきのこぶた』の結末に見る狼の一見残忍な死は、これとは全く相反する愛への裏切りであり、労働の尊厳への背馳であるところに、幼児にとつても、当然のこととして理解されるのである。愛と労働の思想のストーリーへの組み込み、その扱いの質が、良い絵本の決め手となると言つてよい。「総合良書リスト」上位にあるクラシックというべき絵本にはそれが高い水準で描かれていることを人は追認することができる。

ところで、具体的に今日の思想にかかわる動向として取り上げられる第一は、絵本における差別の問題であり、人種および性についての論議である。また第二は、障害者に関する問題提起であり、第三は政

治的次元で問題視された教科書と絵本の関係である。

先ず人種差別に関して問題が提起されたのは、たとえば昭和四六年、小西正保による『ちびくろさんぼ』批判と、その前年既にこれと『シナの五にんきょうだい』を批判した新村徹においてである。「総合良書リスト」においても、その影響は時と共に明白に現われ、それ以後の評価は前者がB→B↓E、後者がC↓E↓Eと急激に下降している。いうまでもなく、それ以前からこれらの絵本を批判的に捉え、たとえば自己作成の良書リストに採択しなかった今江祥智のような例もあった(前回言及)。この『ちびくろさんぼ』批判とは、ストーリー構成に黒人蔑視の思想を見る立場である。また、別に原著者自筆の原画にまして一枚岩的通念で描かれた絵に批判が加えられている。小西は「おもしろいということにかけては完全無欠であつても、それが八非文学Vでしかないところに、ほとんど決定的な負性がある」と言い、「無思想童話の典型」とさえ見る。確かに、昭和二八年の出版当初は、中川李枝子の体験通り、「暴れん坊たちが、ほんのとりこになったのは」この本のおかげであつたことを否定できない。しかし、そこには愛と労働の思想が真の意味では欠如していることを無視することも間違いない。今江は、『ちびくろさんぼ』などいらないよ、という時機である<sup>(3)</sup>」と言う。

『シナの五にんきょうだい』は、その出版社・福音館書店社長・松井直によれば、石井桃子、村岡花子両者の家庭文庫研究会から「理想とする良い絵本」として出版を依頼されたものの一冊だといふ<sup>(4)</sup>。そのことは石井・村岡の両氏にして、ということであり、時代的傾向を割

引いたとしても思想性の軽視がもたらした誤まれる評価であるという点で評価の眼の難しさを明示するものと言えよう。新村は「民族をゆがめて子どもに印象づける危険性が大いにある」<sup>(5)</sup>として文・画・ストーリー・思想の全面を問題とした。ここでも愛と労働は確実に欠けている。なお、この批判の説得性がもたらした結果は強大で、たまたま出版された類似題の『王さまと九にんのきょうだい』に殆んど完全に肩代りされ、筆者作成第三次リストでは条件外に落ちたのである。

性差別についての発言は、たとえば、昭和五七年、藤枝濤子によって「女の子は、受け身、従順、男（の子）の行為の受け手、補助的役割という『特性』をになわされて」、「現実の女の子、女の姿よりも、絵本の中に描かれる姿のほうがずっと性差別的なのだ」<sup>(6)</sup>と問題視される。また、その性差別の状況は一方で「子どもの本に描かれる『男の世界』——競争、成功、富、力、支配、権力といったもの——が、人間の姿としてほんとうに理想的なものなのかどうかをみなおしてみる視点も必要なのではないだろうか」という提案にもなっている。こうした五〇年初め頃からなされた発言は、特に「総合良書リスト」中の特定絵本を批判したものではまだなく、したがって、この観点で評価が急落したものはないが、しかし重要な指摘であることを否定できない。たとえば、性差別が何ら問題とされなかった昔話などでは、その再話はどういかなされるべきか、その点に非常に難しい問題が提起されているからである。むろん、作家の立場では、この問題は無視できぬものであり、今後、たとえば差別を受けた人達の思いを明らかにする昔話・民話が発掘再話される必要がある。藤枝が言うように、「作

る側、与える側が文化の内包する差別的価値観に鈍感な場合、それはそのまま子どもに伝えられ、その価値観を奨励し助長し補強する」<sup>(6)</sup>からである。

これらと関連して、障害者差別の問題例として取り上げられた『ピノキオ』は、それ自体「総合良書リスト」中にないことから、ここでは特に触れることをしないが、一つの波紋を呼び起こし、明確な見解を求めていることは否定できない。こうした時、障害者を登場させた創作が誕生したことは注目すべきことである。「総合良書リスト」中にはそうした絵本は未だ長谷川集平の『はせがわくんきらいや』しか現われていないが、今後の重要な主題の一つとなるであろう。そしてこの問題への切り込みは、児童文学ないしは絵本の思想性を一段と上げ高めて行くものと考えられる。『はせがわくんきらいや』は、昭和五二年の出版後忽ち筆者作成第三次リストで一五位を獲得している。これに引き続く同人の作品や吉村敬子の『わたしいややねん』<sup>(7)</sup>他が、今後その可能性を拓ける第一歩となるであろう。

最後に、昭和五六年、『おおきなかぶ』をめぐる教科書問題が現われた。これは「総合良書リスト」で見ると、昭和三七年の出版以来三次にわたるリストで常にA段階にある古典の一つであるだけに、重要問題として児童文学界で捉えられた。たとえば、『児童文学アニュアル一九八二』は古田足日の「教科書問題」と題する文を載せたが、そこで古田は「この教科書攻撃を『戦後の児童文学史のなかでも特筆すべき事件』と考える」<sup>(7)</sup>とした。つまり、彼は「政治権力が教科書というレベルでだが、児童文学の世界に直接介入してきた」ことを問題



視し、「この攻撃は子供からことばと想像力を奪い取ろうとする攻撃となっている」と言う。この教科書問題は「教育性」の観点から思想問題を復活させ、児童文学そのものを、また、児童文学における思想性を批判材料にしたものである。しかし、それは皮肉にも思想性の重要性を児童文学にあらためて意識させたものとも言えよう。要は、その思想性をどのようなものとして把握するかということである。人間の生き方の原点に逆上って、思想の根底が愛と労働にかかわることを再確認し、それを深める必要がある。その点で、このように突如提出された政治的見解が妥当であるかどうかが裁断されねばならない。さもないと、古田が言及するように、「偏向作品が存在するという幻想をつくり出<sup>(?)</sup>」す危険が確かにある。

#### 四、統計による諸考察

「総合良書リスト」を手がかりに、年代的にどのような高度の作品が生まれてきたかを整理検討してみよう。表一〇に見るとおり、高位第Ⅰ、第Ⅱ段階では、出版後の年数とも関係はしているが、その一つの山が二八、九年に、そして第二が三十七年から四〇年の間に見られる。また、第三は四十二年から四四年迄の出版のものと捉えられよう。したがって、いわば、三六年以降四五年迄の一〇年間に、質の高い絵本が目立って出版されたことになる。つまり、それは「総合良書リスト」の全一四三冊中九八冊、六八・五%に及ぶものである。特に古典にラックしうる第Ⅱ段階までの全五七冊では四三冊、七四・五%という高

位に達していることが注目される。このことから戦後我国の絵本出版に関して、ほぼ一〇年毎に次のような時期区分ができると考えてよいだろう。

- 第一期 二八―三五年 外国絵本移植期＝本邦絵本培養期
- 第二期 三六―四五年 絵本出版開花アピール期
- 第三期 四六―五四年 絵本の多様化・浸透期
- 第四期 五五―？ 絵本出版界拡大期

なお、別の観点で各期の新しい状況を捉えれば、それぞれ順に、翻訳出版期、絵本講習会期、子どもの本専門店期、絵本賞・民間文庫開設期と言つてよい。こうした時期区分については、もちろん、創る側の動向・思潮による判断も成り立ちうるが、ここでは、試みに、結果として評価された絵本を手がかりとしたわけである。

ところで、各段階ないしは各期の本邦絵本内数から見て、翻訳絵本の占める数の大きさがやはり注目される。「総合良書リスト」中の翻訳絵本をとりあげると、表一一のように全一四三冊中七七冊、五三・八%の多数に及び、特に第Ⅰ段階では七一・四%となっている。元来、我国戦後の絵本出版は岩波書店の外国絵本翻訳に幕を開けたわけであり、また、翻訳対象として選ばれた本は、その後とも既に選別のふりにかけられたものである以上このことは当然であるが、なお留意されるべきことではある。いうまでもなく芸術に国境はないと言えるが、民族のもつ伝統や歴史、考え方など、土着の生活から、翻訳絵本に匹敵するものが生まれてこそ、我国がインターナショナルな絵本文化に對して貢献できるわけだからである。また一方、子ども達の生活の土

表10 段階別（Ⅰ～Ⅴ）出版年統計

年\段階	I	II	III	IV	V	計	備 考	時期区分
28		1				1		} 13(4)
29	5	1 (1)	2			8 (1)		
30								
31		1	1 (1)			2 (1)		
32								
33								
34	1 (1)	1 (1)				2 (2)		
35								第Ⅰ期
36	1	1	1 (1)	1	1	5 (1)		} 98(45)
37	3 (2)	3 (2)	2 (1)	1	1	10 (5)		
38	7 (3)	3 (2)		3 (2)		13 (7)		
39	3 (1)	3	2 (2)	1		9 (3)		
40	3	3 (1)	3 (1)	3 (3)		12 (5)		
41		2 (1)		3 (2)	1 (1)	6 (4)		
42	3	3 (1)	5 (2)	4 (3)	2	17 (6)	↑	
43	1	2 (1)			2 (1)	5 (2)	第1次 リスト作成	第Ⅱ期
44	1 (1)	1	4 (2)	4 (1)	4 (2)	14 (6)		
45			1 (1)	3 (3)	3 (2)	7 (6)		
46		1 (1)	2	2 (2)		5 (3)		} 30(16)
47		1 (1)	2		2 (1)	5 (2)		
48				1 (1)	2 (1)	3 (2)		
49		1 (1)	1 (1)		3 (1)	5 (3)	↑	
50		1 (1)	1		4 (1)	6 (2)	第2次 リスト作成	
51					3 (2)	3 (2)		
52			1 (1)	1	1 (1)	3 (2)		
53								
54								第Ⅲ期
55				1		1 (0)		} 4 (2)
56					1 (1)	1 (1)	↑	
57							第3次リス リスト作成	
計	28 (8)	29 (14)	28 (13)	28 (17)	30 (14)	143 (66)		

( ) 内、本邦絵本内数

台により、近い素材の方が、子ども達の理解を高め、想像力の展開、心理の充足により、容易になじむことができると言えるからである。このことは、子ども達の好む本との関係で後にあらためて触れるつもりである。なお、我国のこれまでの文化なり、知力・創造力が、良い絵本への可能性を未だ開発されずもっていると言えないだろうか？

もつとも、翻訳絵本の比率は、年次を追って若干減少していることが認められる。しかしそれは必ずしも大きく目立つものではない。そして相変らず西高東低が維持されている。特に段階別対比が示すものは、現時点での我国絵本の水準を象徴的に示すものと考えられよ

表 11 翻訳絵本の数と率

( ) 内は%

年 日 外 段階	1次 (S. 43)			2次 (S. 50)			3次 (S. 57)			延 計			全体計 (I~V)			
	日	外	計	日	外	計	日	外	計	日	外	計	段階	日	外	計
A	6	11	17	9	17	26	9	17	26	24 (34.8)	45 (65.2)	69 (100)	I	8 (28.6)	20 (71.4)	28 (100)
B	7	10	17	9	18	27	15 (60.0)	10	25	31 (44.9)	38 (55.1)	69 (100)	II	14 (48.3)	15 (51.7)	29 (100)
C	6	10	16	17 (63.0)	10	27	13	15	28	36 (50.7)	35 (49.3)	71 (100)	III	13 (46.4)	15 (53.6)	28 (100)
D	9	11	20	12	19	31	11	18	29	32 (40.0)	48 (60.0)	80 (100)	IV	17 (60.7)	11 (39.3)	28 (100)
E	11 (64.7)	6	17	13	7	20	18	17	35	42 (58.3)	30 (41.7)	72 (100)	V	14 (46.7)	16 (53.3)	30 (100)
計	39 (44.8)	48 (55.2)	87 F 56	60 (45.8)	71 (54.2)	131 F 12	66 (46.2)	77 (53.8)	143 F 0	165 (45.7)	196 (54.3)	361 (100)	計	66 (46.2)	77 (53.8)	143 (100)

註) 但し、外国絵本数には外国民話の翻案・再話も含む

日 = 本邦絵本  
外 = 翻訳絵本  
F = 未出版

う。ただ、本邦絵本の「六〇%プラス」段階が年を追ってE↓C↓Bと上昇していることは評価してよい。他方、我国絵本で国外で評価されているもの、受賞したもの、また、積極的に輸出されているものの増加が目玉されるべきであろう。『児童文学アニュアル一九八二』および『同、一九八三』によれば、輸出絵本は、一九八一年で延六一種、八二年で八四種となっている。今後一層優れた創作者の輩出が期待されるところであり、一方、リスト作成者の評価見識の問題が検討される必要があろう。たとえば、外国絵本コンプレックスのために正しい評価ができない恐れは今ないものかどうか？

絵本題材の点で、「昔話」「民話」などと「創作絵本」とを本邦絵本に比べて比較すれば、創作絵本が圧倒的に多くなっており、全六六冊中五〇冊、七五・八%を占め、特に第Ⅲ段階以下の場合一層高くなっていることがわかる。いうまでもなく、創作絵本の可能性は無限と云うべきものであるが、一方、民族的ないしは民俗的個性に立つ昔話・神話・民話は、ナショナルな形で人間の生活や思いを簡潔に示して人類文化を豊かにするものであり、一層開発されるべきものである。無論、本来語り継がれたそれは、再話し、絵本化することの困難なものであるが、絵本という複合芸術の中に質的に高い形で表現されれば、それに応じて創作絵本の質も高まるものと考えられる。なお、各良書リストでは見落とされた良質の昔話ないしは民話・神話絵本が既にあるとすれば、評価の眼が再び問題となってくる。現に市販されているこれらの分野の数から言えば、リスト作成者が創作絵本の自由性に幻惑されている恐れなしではない。

## 幼児絵本の評価をめぐって

中	川	李	枝	子	4冊	川	正	文	2冊
エ	ッ	ッ	ツ	ツ	4	居	直	直	2
バ	ト	ト	ン	ン	3	井	智	智	2
レ	ー	ー	ニ	ニ	3	古	子	子	2
グ	リ	リ	ム	ム	3	川	太	郎	2
松	谷	み	子	子	3	井	桃	子	2
キ	一	ツ	ツ	3	石	一	ル	2	2
斎	藤	隆	介	3	口	さ	と	2	2
瀬	田	貞	二	3	佐	利	子	2	2
木	下	順	男	2	神	ッ	ス	2	2
渡	辺	茂	2	2	ハ	チ	三	2	2
フ	イ	シャ	一	2	田	征	雅	2	2
マ	ッ	シャ	ク	2	安	光			
	ル			2		野			

(同数順不同)

表14 瀕出訳者(全29人中)

赤瀬大ウ山長	羽川村チ本	末康百ヨ忠新	吉男子フ敬太	6冊 4 3 3 3 3	滝 平 二 郎 ン ク 郎 一 夫	マ デ 三 誠 利	3冊 2 2 2 2 2
--------	-------	--------	--------	-----------------------------	---	-----------------------	-----------------------------

(同数順不同)

表14 瀕出訳者(全29人中)

石	井	桃	子	12冊
瀬	田	貞	二	10
内	辺	莉沙	男	8
渡	川	茂	始	5
木	島		弥	4
光	吉	夏	子	4
矢	川	澄	子	3
間	崎	るり	子	3
村松と今谷大岡岡田江川塚	計　62冊			

註) 翻訳絵本計は77冊

「総合良書リスト」中の瀕出作家として二冊以上推薦されている作家をとりあげると表一二のようになる。これによると、中川李枝子およびエッツの各四冊を最高に、二五人、計六一冊となり、全体の四二・七％がこれら全九八人中四分の一の作家によって書かれたものとなる。このうち日本人は一六人三七冊、平均二・三冊、外国人九人二四冊、平均二・七冊であるから、外国人作家の活躍が注目される。なお全体としては日本人四三人、四三・九％、外国人五五人、五六％となっており、この点からも前述の西高東低はほぼ同様のパーセンテージで確認される。

瀕出画家として、二冊以上出ている画家を取り上げると、表一三の通り、赤羽末吉の六冊を最高に、全五四人中一二人、計三五冊となつ

っている。このうち日本人は九人二八冊、外国人三人七冊となっており。我国の場合、画家が特定されていることがわかる。なお、翻訳絵本については一冊を除くすべてが原著どおりの絵になっている点、絵本の翻訳出版および評価の観点から注目すべきことであろう。一方、外国民話の再話に対する評価が日本人画家の創造による所大きいと判断されることは、既述の絵と文の關係に照らして留意してよいことである。このことは、今後、絵本創作者形成過程ないしは養成過程で、我国でも当初から絵と文を共に構想できる人材の登場を期待させる。絵本創作者にとって、他の文学ジャンルないしは芸術にない二面の統一の要求が宿命的に求められていることを十分認識しなければならない。

瀬出訳者については、石井桃子の一二冊を筆頭として、二冊以上の者が全訳者四人中二人六二冊を占めており、全翻訳絵本七七冊中八〇・五%がこれらの人達によって担われていることがわかる。既に前回も言及したように、特に絵本の場合、訳者が単なる翻訳者ではないことが明瞭に認識され留意されるべきであろう。たとえば、少し長い引用になるが、渡辺茂男の翻訳姿勢を注目しておこう。

絵本の場合には、文章が短く平明であるために、翻訳は非常にやさしいと考えられがちですが、翻訳者は、絵本の形で表現された一つの世界の全体を、くまなく理解することを要求されます。いいかえれば、言語感覚と視覚と感性のすべてを働かせて、その世界にはいることを要求されるのです。(中略) これらすべてを投入することによって、文字を読み、絵を読み、空間を読み、物語を読み、作者の創造した世界を読み、初めて叙述や文体や感情を日本語におきかえ、心象を日本人の心の目に見えるものにおきかえることができます。しかも、それほど努力をしても、原作の底に流れる意味や思想を伝えることはむずかしいものです。<sup>(8)</sup>

なお、石崎秀和によるスエーデン刊『トッテの絵本』(日本版『トミーちゃん』(偕成社)の翻訳に関する詳細な分析ならびに実験研究<sup>(9)</sup>は、別の意味から注目されるべきである。石崎によれば、翻訳の姿勢の中に、既に異文化がもつ価値観の相異がひそみ、原作の性格や質が崩されてしまうことがあるとされる。つまり、彼は、『トミーちゃん』は、

「翻訳としては大変出来の良い作品であるにもかかわらず、私が一番気にかけている『養育の基本姿勢』、『子ども観』といったものが、奇妙に原作とは異<sup>(10)</sup>つてい」ると問題にするのである。

絵本出版社の推移は表一五A、Bの通りである。その動向を見ると、絵本に関しては、前回歴史的に見たように、福音館書店と岩波書店(以下、書店の文字を略す)、特に前者の出版活動が注目される。つまり、「総合良書リスト」全一四三冊中八〇冊、五五・九%が福音館のものであり、これに岩波の一六冊、一一・二%が落差をもって続く。もっとも、岩波は第一次リストだけを見れば、一四冊中A段階が七冊と半数を占めたのに対し、福音館は六一冊中一〇冊にすぎない。なお、後述のように、急上昇してくる偕成社の一五冊、一〇・五%、ポプラ社の九冊、六・三%を加えると、この四社が一二〇冊、八三・九%を占め、「総合良書リスト」中では他の一四社が残り極く少ない部分を受けもっていることとなる。特に、第I、第II段階では五七冊中四〇冊、七〇・二%は福音館のもの、一〇冊、一七・五%が岩波のもので、合計五〇冊、八七・七%がこの両社の絵本でもっていることになる。しかも、後述するように、「子どもの好きな絵本のリスト」(前回及び今回の表七)と一致するものは、五四冊中三三冊、五九・三%が福音館のもの、七冊、一三・〇%は岩波のもので、とりあげられた絵本の実数とはほぼ同水準で高い。また、ベスト・セラーと一致するもの一九冊中一三冊、六八・四%、ロングセラーと一致する三九冊中二五冊、六四・一%は同様福音館のものである。これらの出版経営努力は、両社が単なる商業主義を越えて、文化理想にかかわる重要性を認識した

表 15 A 年次別・段階別出版社統計

( ) 内は%

年 階 段	社	第1次 (S. 43)				第2次 (S. 50)				第3次 (S. 57)				計 (延数)			
		福	岩	他	計	福	岩	他	計	福	岩	他	計	福	岩	他	計
A		10	7	0	17	17	7	2	26	14	1	11	26	41 (59.4)	15 (21.7)	13 (18.8)	69 (100)
B		13	4	0	17	19	3	5	27	9	1	15	25	41 (59.4)	8 (11.6)	20 (29.0)	69 (100)
C		14	2	0	16	15	2	10	27	20	4	4	28	49 (69.0)	8 (11.3)	14 (19.7)	71 (100)
D		15	1	4	20	18	3	10	31	17	5	7	29	50 (62.5)	9 (11.3)	21 (26.2)	80 (100)
E		9	0	8	17	6	1	13	20	20	5	10	35	35 (48.6)	8 (11.1)	31 (43.1)	72 (100)
計		61 (70.1)	14 (16.1)	12 (13.8)	87 F 56	75 (57.3)	16 (12.2)	40 (30.5)	131 F 12	80 (55.9)	16 (11.2)	47 (32.6)	143 F 0	216 (59.8)	46 (12.7)	99 (27.4)	361 (100)

※「その他」出版社名及内数

1次 2次 3次 計  
備成社 1→12→15=28  
ポプラ社 4→9→9=22  
童心社 2→3→3=8  
文化出版 0→3→3=6  
至光社 1→2→2=5  
こぐま社 1→2→2=5

講談社 各  
岩崎書店 4  
好學社 3  
小峰書店 3  
他2のもの 銀河社、ひかりのくに、理論社、富山房、  
1のもの 文研出版、すばる書房

福＝福音館  
岩＝岩波  
他＝その他  
F＝未出版

表 15 B 「総合良書リスト」における段階別出版社統計

段 階 数	出 版 社 目	福 音 館	岩 波	備 成 社	ポ プ ラ 社	童 心 社	文 化 出 版	至 光 社	こ ぐ ま 社	岩 崎 書 店	好 学 社	富 山 房	小 峰 書 店	す ば る 房	理 論 社	ひ の か く り に	講 談 社	銀 河 社	文 研 出 版	%
I 28冊	実数冊 段階内多 社・内多	19 67.9 23.8	7 25.0 43.8		1 3.6 11.1			1 3.6												28 100
II 29冊	実数冊 段階内多 社・内多	21 72.4 26.3	3 10.3 18.8	1 3.4 6.7	2 6.9 22.2					1									1	29 100
III 28冊	実数冊 段階内多 社・内多	8 28.6 10.0	5 17.9 31.3	3 10.7 20.0	1 3.6 11.1	1	2		2		2	1	1	1			1			28 100
IV 28冊	実数冊 段階内多 社・内多	19 67.9 23.8		5 17.9 33.3	3 10.7 33.3	1														28 100
V 30冊	実数冊 段階内多 社・内多	13 43.3 16.3	1 3.3 6.3	6 20.0 40.0	2 6.7 22.2	1	1	1		1		1			1	1		1		30 100
計 143冊	実数冊 全出版比	80 55.9	16 11.2	15 10.5	9 6.3	3 2.1	3 2.1	2 1.4	2 1.4	2 1.4	2 1.4	2 1.4	1 0.7	1 0.7	1 0.7	1 0.7	1 0.7	1 0.7	1 0.7	143 100

(なお、「全出版比」の場合、各社すべて四捨五入で繰り上がったため合計が100%を越えている)

ことによるものとして注目してよいだろう。

なお、経年的推移を見れば、福音館は第一次八七冊中六一冊、七〇・一％が、第二次一三一冊中七五冊、五七・三％と下降しており、岩波に至っては、第一次一六・一％が第二次一二・二％と下る中で、A B段階では第二次一〇冊が第三次二冊に激減し、代って、偕成社が一↓一二→一五冊に、ポプラ社が四↓九冊と進出している。その他を含めたこれら新入出版社の作品は、そのユニークさで評価され、これまでも見落とされがちであった作品に可能性を開くものとして注目される。

ところで、岩波の凋落には次の原因が考えられる。①本の型が、後続の各種絵本に比して制限されている上、新鮮味に欠けてきたこと。特にこれは書棚に陳列された場合、後述の子どもの評価に著しいように無視できないマイナス点となっていると言える。これは、ベストセラーおよびロングセラー統計においても同様である。②これと関連して、リスト作成者によっても、絵本分類から押し出され、あたかも童話のようない扱いを受けることとなっている。絵本とは何か、が絵と文の関係で論ぜられるとき、そのボーダー・ラインにおかれざるをえないものだからである。③また、特に色彩に問題があるろう。④さらに、内容上でも、他に多様な絵本が出版されるにつれて目立たなくなってしまうことを否定できない。その意味で『ちいさいうち』や『かにむかし』の大型化は一つの賢明な解決策であった。なお、福音館の場合、下降の目立つ絵本は、それぞれ或程度の理由を推定できる。たとえば、『こどもがはじめてであう絵本』は同種のものが他にも種々出版され始めたこと、セット単価が高額であることなどがそれである。以下の

表16A 絵本ベスト・セラー出版社

福音館	音成	館社	20冊	童岩	心崎	社書	4冊
偕成	講談	社社	11	あか	ね計	書店	4冊
ポプラ		社	7			房	2冊
			4				52冊

『児童文学アニュアル1982』（偕成社）  
「1981年ベストセラー150冊」より集計

表16B 絵本ロング・セラー出版社

福音館	音成	館社	39冊	ひかり	のく	に	6冊
講談	ポ	社	25	理P	論H	社P	6冊
偕成	ラ	社	16	集理	H英	社	5冊
岩崎	書	社	14	理旺	論文	社	4冊
あかね	書	店	13	研出	文出版	社	4冊
文化	出版	房	10	新日	本出版	出版	3冊
文学	レー	局	10				3冊
フレイ	ベル	研	9				
金の	星	館	8				
		社	7				
				計			186冊

『児童文学アニュアル1982』（偕成社）  
「1981年ロングセラー750冊」より集計

諸絵本については後日十分検討したいと思う。いずれにしても、第三次においては急激に新種の絵本が推薦されるようになっており、少なくとも絵本関係専門家の眼から、「今更福音館・岩波でもあるまい」という見方が自然に生まれてきたものと言えよう。したがって、これまでも、ボーダー・ラインにあったものについては、むしろ新しいものの方が好んで選ばれ、結果的に落とされることがあったと言えよう。もちろん、この場合、その評価が正しいかどうかは、逆にあらためて問題視されねばならないだろう。

『児童文学アニュアル一九八二』によるベストセラー絵本およびロングセラー絵本は表一六A、Bの通りとなり、「総合良書リスト」統計では表一七A、Bのようになる。ともに福音館の圧倒的優位を示し

表17A 出版社とO. B. L

出版社名 合致事項	福 音 館	岩 波	偕 成 社	ポ プ ラ 社	こ ぐ ま 社	岩 崎 書 店	文 化 出 版	童 心 社	講 談 社	小 峰 書 店	計
「子どもの好きな絵本の リスト」と重なるもの O	32	7	4	3	2	2	1	2	1	0	54
ベスト・セラーと重なる もの B	13	0	2	1	0	1	0	2	0	0	19
ロング・セラーと重なる もの L	25	0	2	5	0	1	2	2	1	1	39
延 計	75	7	8	9	2	4	3	6	2	1	112

表17B 出版社とX. O. B. L

出版社名 事 項	福 音 館	岩 波 社	偕 成 社	ポ プ ラ 社	こ ぐ ま 社	岩 崎 書 店	文 化 出 版	童 心 社	講 談 社	小 峰 書 店	銀 河 社	至 光 社	文 研 出 版	富 山 房	理 論 社	好 学 社	ひ か り の く に	す ば る 書 房	計
「総合良書リス ト」と「子どもの 好きな絵本のリス ト」の不一致 X	42	9	11	2	0	0	1	1	0	0	1	2	1	2	1	2	1	1	77
O. B. L と合致	9		2			1		2											14
B. L	2			1															3
O. L	11			1			1		1										14
O. B	1																		1
L.	3			3			1			1									8
B.	1																		1
O	11	7	2	2	2	1													25
計 (X を除く)	38	7	4	7	2	2	2	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	66
全 計	80	16	15	9	2	2	3	3	1	1	1	2	1	2	1	2	1	1	143



ている。なお、表一六および一七の間で際立っているのは講談社絵本の売れ方である。各種リストの作成者に問題が有るのか、購入する大人の方に問題が有るのか、いずれにしても子ども達の好みが必ずしも多くない点、留意する必要がある。

ところで、既に見た通り、出版量の急激な拡大は、今日、被推薦絵本を多様に拡大分散させて来ている。したがって、第三次での下降絵本の中には、それが当然の評価結果である場合と、量に押されたために、本来高質のものが影を薄くしていった可能性もあることを留意せねばならない。そのことは、新刊本においても良い絵本が見落とされている場合が増えつつあるということである。たとえば、雑誌『絵本』は各年度の出版絵本について「絵本ハイライト」と題して推薦を多数から求めているが、そこで挙げられた絵本のすべてが、総合リスト作成過程でうまく網の中に入ってくるわけではない。このことは、繰り返しになるが、的確な絵本評価の重要性をあらためて確認させるものである。それは、数量的に扱う統計リストの限界を一方で示しながら、他方、リスト・アップされるに至ったものの価値を示し、また、評価の仕事がおろそかにはできないことを示唆している。

## 五、「子どもの好きな絵本」との関係

絵本の評価に関して、子ども達自身によるものを無視できないことは、これまでも繰り返し述べてきた。特に、大人のそれとの違いを、子どもの心理性において検討する必要があることを、留意してきた。

両者の選択の特徴と齟齬の理由は果して何であろうか？ 既に前回示し、今回「備考」欄を補充した表七「子どもの好きな絵本のリスト」は、「総合良書リスト」の約半数しかリスト・アップできなかった限界はあるが、それでも、段階別対比にはそれなりの意味があることから、むしろ、子どもの選択を主眼においたその二倍量において、逆に重視してよい参考資料であろう。

表八Aに見る通り、両者の評価がほぼ一致するものは三八・四%、ずれがあるものが六一・六%となっている。中でも、二倍量においても一致するものがない子どもの好きな絵本が、全七三冊中一九冊、二六・〇%も占めていることは、絵本評価に関して無視することのできない数字である。しかも、これらが大人が予め選択して提供し、時には読み聴かせた中からの状況であることを注意すべきである。つまり、三分の一しか合致しないばかりか、評価水準もかなり違うということである。特に推薦度の低い方がその差が大きいということが意味するものは何か？ たとえば、「子どもの好きな絵本のリスト」を上・中・下に三区分した場合、上段階では六一・九%が合致するが、中段階の場合三五・七%、下になると二〇・八%しか合致しない。逆に「総合リストにないもの」は、一四・三%、二八・六%、三三・三%と上昇する。つまり、表八Bの比率にも見るように、すぐれた絵本、たとえば第I段階においては子どもも高く評価し、逆にそういう評価を得るが故に当然クラシックとして評価されうることになるのである。

なお、「子どもの好きな絵本のリスト」と同数で「総合良書リスト」を区切った場合はどうなるであろうか？ ただ、分割の都合上、後者の

表 7 子どもの好きな絵本のリスト

(前回のものに「備考」内容を補充)

No	書 名	文	絵	訳	出版社	出版年	選 択 数	子 対 大 人	総合良書リスト			備 考
									No	順位	推薦数	
1	ぐ り と ぐ ら				福 音 館	38	10		2	2	48	B L
2	ち び く ろ さ ん ぼ				岩 波	28	9	>	37	37	25	
3	三びきのやぎのらがらどん				福	40	8		8	6	43	B L
4	11 び きの ね こ				こぐま社	42	8	>	63	62	20	
5	しょうぼうじどうしゃじぶた				福	38	8		19	19	35	B L
6	て ぶ く ろ				福	43	8		4	3	47	B L
7	おおきなおおきなおいも				福	47	7	>	46	41	24	L
8	きかんしゃやえもん				岩 波	39	7		14	14	40	
9	しろうさぎとくろいうさぎ				福	40	7		9	6	43	B L
10	ち い さ い お う ち				岩 波	38	7		1	1	52	
11	は け た よ は け た よ				偕 成 社	45	7	>	81	73	17	B L
12	ひ と ま ね こ ざ る				岩 波	29	7		17	17	36	
13	あなたのいえわたしのいえ	加 古 里 子	同		福	47	6	×				
14	いたずらかんしゃちゅうちゅう				福	36	6		5	5	46	B L
15	お お き な か ぶ				福	37	6		10	10	42	B L
16	か に む か し				岩 波	34	6		6	6	43	
17	11 びきのねことあほうどり	馬 場 のぼる	同		こぐま社	47	6	×				
18	そ ら い ろ の た ね				福	39	6	>	74	73	17	L
19	だるまちゃんとかみなりちゃん	加 古 里 子	同		福	43	6	×				
20	だるまちゃんとしてんぐちゃん				福	42	6		36	34	26	L
21	ど ろ ん こ ハ リ ー				福	39	6		7	6	43	L
22	いやだいやだの絵本	せ な けいこ	同		福	44	5	×				
23	お ば け の パ ー バ パ				偕 成 社	47	5	>	83	73	11	B L
24	か ば く づ				福	37	5		3	3	47	L
25	くるまはいくつ	渡 辺 茂 男	堀 内 誠 一		福	42	5	×				
26	ぐりとぐらのおきやくさま	中 川 李枝子	山 脇 百合子		福	42	5	×				
27	ぐるんばのようちえん				福	45	5	>	111	106	13	L
28	子どもがはじめてであう絵本				福	39	5		16	15	37	B L
29	三 び きの こ ぶ た				福	42	5		39	37	25	L
30	し ず く の ぼ う け ん				福	44	5	>	102	99	14	
31	しろくまちゃんのほっとけーき	森 比左志 他	わかやま けん		こぐま社	47	5	×				
32	た ろ う の お で か け				福	38	5		41	41	24	L
33	ち の は な し	堀 内 誠 一	同		福	53	5	×				
34	と こ ち ゃ ん は ど こ				福	45	5	>	112	106	13	L
35	わ た し の ワ ン ビ ー ス				こぐま社	44	5	>	60	58	21	
36	あかちゃんのほんシリーズ				偕 成 社	41	4	×	30	29	29	
37	か さ じ ぞ う				福	44	4		50	47	23	
38	す て き な 三 に ん ぐ み				偕 成 社	44	4		34	34	26	
39	だ い く と お に ろ く				福	37	4		68	65	19	L
40	ち い さ い モ モ ち ゃ ん				講 談 社	39	4	>	32	31	28	L
41	ち か ら た ろ う				ポプラ社	43	4		66	65	19	
42	と ら っ く と ら っ く と ら っ く				福	36	4	>	61	58	21	L
43	ど ろ ん こ こ ぶ た				文化出版	46	4		95	93	15	
44	の ろ ま な ロ ー ラ ー				福	40	4	>				
45	は じ め て の お る す ば ん	しみず みちを	山 本 まつ子		岩崎書店	47	4	×	82	73	17	
46	ピーターラビットのおはなし				福	45	4	>				
47	も ぐ ら と じ ど う し ゃ	ベ チ シ カ	ミ レ ル	うちだ りさこ	福	44	4	×				
48	も ぐ ら と ず ぼ ん				福	42	4	>	122	121	11	
49	モ チ モ チ の 木				岩崎書店	46	4		51	47	23	

上  
↑

中  
↑

(次頁につづく)

幼児絵本の評価をめぐって

№	書名	文	絵	訳	出版社	出版年	選択数	子対大人	総合良書リスト			備考	
									№	順位	推薦数		
50	い や い や え ん	大 川 悦 生	遠 藤 て る よ		福	37	3	<	25	24	31	B	
51	い な い い な い ば あ し				童 心 社	42	3	>	88	86	16	B	
52	い っ す ん ぼ う し				ポプラ社	42	3	>	97	93	15	L	
53	う ん が に お ち た う し				ポプラ社	42	3		77	73	17		
54	エ ル マー の ぼ う け ん				福	38	3	>	100	99	14	B	
55	お し い れ の ぼ う け ん				童 心 社	49	3		84	73	17	B	
56	王 さ ま と 九 人 の き ェ う だ い				岩 波 社	44	3		79	73	17	L	
57	お お き な き が ぼ し い				偕 成 社	46	3	>	113	106	13		
58	げ ん き な マ ド レー ス				福	47	3	>	116	114	12		
59	こ ぐ ま ち ゃ ん あ り が と う	わかやま けん	同	光 吉 夏 弥	こぐま社	47	3	×	93	93	15	L	
60	三 び き の く ま	H・A・レイ	同		福	37	3	>					
61	じてんしゃにのるひとまねごさる				岩 波	29	3	×					
62	スーホの白い馬	ブリュノフ	同		福	42	3	<	27	24	31		
63	ぞうのバパー				評論社	49	3	×					
64	ちいさなゆうびんひこうき				ディズニ	53	3	×					
65	チキチキパン	フ レ ミ ン グ	バーニングム		同	富山房	55	3	×	114	114	12	B
66	ないたあかお	偕成社				40	3	>					
67	花さき	岩崎書店				44	3	×					
68	ひとまねごさるびょういんへいく	H・A・レイ	同	光 吉 夏 弥	岩 波 社	43	3	×	52	52	22	L	
69	ふしぎなたいこ				岩 波	29	3	<					
70	ふしぎなたいこ				福	38	3	<	11	10	42		
71	もりのなか	福	38		3	<	12	12	41				
72	わっしょいわっしょいぶんぶん	か こ さ と し	同		偕成社	48	3	×	45	41	24		
73	わたしとあそんで				福	43	3						

- 註) 1. 「文」「絵」「訳」欄については総合リストを参照のこと。ここでは総合リストに掲載されていないもののみ明示してある。  
2. 「子ども対大人」欄の記号は次の意味をもつ。(「子どもの好きな本のリスト」対「良書リストの統計による総合リスト」)  
空欄 子ども対大人の評価に大きな差が認められないもの 28冊  
× 大人の評価(「良書リストの統計による総合リスト」)では10推薦をえてないもの 19冊  
> 子どもの評価の方が大人の評価より著しく高いと考えられるもの 22冊  
< 大人の評価の方が子どもの評価より著しく高いと考えられるもの 4冊

表18 半切「総合良書リスト」対「子どもの好きな絵本のリスト」の比較

総合良書リスト		絵本のリスト		両者の評価に 大差なし	総合リストに ないもの	子どもの評価が 高いもの	大人の評価が 高いもの
段階	冊数	段階	冊数				
I	28	上	21	13冊	3冊	5冊	0
II	29	中	28	10	13 (8)	5 (10)	0
III	28	下	24	5	15 (8)	0 (7)	4
計	実数		73	28	31 (19)	10 (22)	4
	%		100%	38.4%	42.5% (26.0%)	13.7% (30.1%)	5.5%

( ) 内は表8の場合、ただし移動のあった部分のみ

八五冊が対象となるが、ちょうど上・中・下がⅠ・Ⅱ・Ⅲの段階に対応し、比較には好都合だと言える。この場合、表一八に見るとおり、「両者の評価に大差なし」と「大人の評価が高いもの」においては全く移動がないが、大きく変化したのは、「総合リストにないもの」の増加と、逆に「子どもの評価が高いもの」の減少である。つまり、前者で、全七三冊中一二冊プラスの三一冊、二六・〇%から四二・五%への増加、後者で、三〇・一%からの一三・七%の減少がそれぞれである。

特に前者の提示するものは既述のずれを再確認させるものとして重要である。なぜなら子どもが高く評価するものが脱落せざるを得なかったからである。

以上の考察を通じて言えることを整理すると、①古典と言うべき優れた絵本においては、両者の評価の一致度が高いということ。たとえば、表八Bの大人から見た場合の第Ⅰ段階で、実数上五一・〇%の対比が六四・三%に上り、内部対比で「子どもの好きな絵本」中の二四・七%を占めることである。また②比較的子どもの評価が高いものの方が多く、そこに不一致への要因があること。もちろん、前回も触れたように、子どもの評価力が優位だというのではなく、子どもの判断がより高められる必要があるだろうし、逆に大人の側に、子どもの「心理性」への理解が求められていると言えよう。これらの齟齬の具体的分析は後日を期することにする。なお、各良書リストとこれらを照合すれば、どのリスト作成者が最もよく子どもの眼で絵本を見ているかが判ると言える。以上のことから、一般的に言えば、普通大人が良書と考える絵本を準備するに際しては、最低三倍以上の量に拡大する必要があるだろう。つまり、三百冊の提供の中で、ようやく子どもの好む絵本百冊を包含することができるということである。

次に、大人と子ども両者の評価の特徴で若干気がつくことは、③大人が外国もの、特に翻訳絵本を高く評価する傾向にあるということである。「子どもの好きな絵本のリスト」に出ていない絵本は、第Ⅳ段階以上で六二冊であるが、そのうち翻訳絵本は三八冊、六一・三%に及ぶ。特に第Ⅰ段階では一〇冊中、実に九冊、九〇・〇%がそれである。

ここに先にも指摘した外国絵本コンプレックスがないかどうか注意する必要がある。外国ものを排除するということでは全くなく、正しい評価がなされているかどうかという懸念である。④逆に子ども達は日本のものを好む傾向がある。つまり、「子どもの好きな絵本のリスト」全七三冊中四三冊、五八・九%が我国のものであり、これに外国民話中、日本人作家による再話絵本五冊を加えると一層増えることとなる。ちなみに、「総合良書リスト」における実際の日・外比は既述の通り四六・二%であるから、比較して大きいと言えよう。しかも、子どもの側から見て、大人と合致しなかった一九冊だけを取り上げると、そのうち一四冊、七三・七%は本邦絵本である。表一八の方で見ても、二二冊、七一・〇%がそれに当る。同様、「子どもの評価が高いもの」二二冊中一四冊、六三・六%が本邦絵本であり、表一八で言えば、一〇冊中七冊、七〇・〇%が本邦のものである。これは、生活上の親和性や価値観とかかわって重要視すべきことであろう。つまり、前にも触れた通り、我国絵本創作者たちの努力が子ども達によっても期待されているというわけである。

なお、子どもの好きな絵本とベストセラー、ロングセラーの関係は前回表八Cに示した通り、優位段階のものの一一致度が高い。

## おわりに

幼児絵本の評価をめぐって種々の点で検討を加えてきたが、結論として言えることは、絵本そのものの複合芸術としての評価の複雑性・困

難性から、また、絵本のもつ機能、効果、特に「教育性」の具体的成果を、子どもの「心理性」とともに把握しにくいことから、現在以上に優れた絵本専門の批評家が必要だということである。本論が試みたような量的把握を質的なものに変え、単なる文芸批評を越えた具体的批評をなしうる人材が必要と言える。それは当然のこととして、作家や画家、編集者など作り手とは別の所から出てこなければ真の批評にはならないであろう。しかも、享受者である子ども達と接しながら、子どもを十分に理解し、把握しているような批評家が期待される。それは、しかも、教師や司書など、日常活動の中で、絵本や子どもに近い所で生活している人達をも超えねばならない。文学や美術に対する広く高い批評眼を備えた人物の、できるだけ数多い誕生が望まれる。

それは恐らく、自ら子どもとして、数多くの良質の絵本を享受した人達の中から初めて生まれるものと考えられる。その意味で、良書リストは引き続き、限界と批判を覚悟の上で作り続けられねばならない。そのために、また、それを通して親、司書、教師、作家、画家、編集者、出版担当者、文芸批評家間で一層の論争が行なわれなければならないだろう。その拮抗の中からベクトルの展開において良い絵本が生まみ出されてくるはずだからである。

註 ※ 前回作成の表四を意味する。以下同様。

(1) 『ちびくろさんぼ』小論(『日本児童文学』臨時増刊『絵本』、昭和四十六年十二月、盛光社)

(2) 「幼児の想像力——貧乏保育園のなかで——」(『思想の科学』、昭和四十六年四月、思想の科学社)

- (3) 「絵本のおかれている“場”というもの——絵本に何ができるか——」(註(1)に同じ)
- (4) 「絵本とは何か」、昭和四十八年、日本エディタース・スクール出版部。
- (5) 「名作の評価について——いわゆる『名作』にたいする疑問——」(『日本児童文学』別冊『児童文学読本』、昭和四十五年、すばる盛光社)
- (6) 「子どもの本の新しい主人公像を求めて」(『児童文学』一九八二、昭和五十七年、聖母女学院短期大学)
- (7) 一一四頁、一一五頁。
- (8) 「すばらしいとき——絵本との出会い——」昭和五十九年、大和書房、二二頁、二四頁。
- (9) 「トッテの世界——幼児絵本の翻訳をめぐる比較教育的検討——」(『哲学』第六九集、昭和五十四年、慶応義塾大学三田哲学会)
- 「トッテと大人——幼児絵本の翻訳に関する比較教育学的実験——」(『哲学』第七七集、昭和五十八年、慶応義塾大学三田哲学会)
- (10) (9)の前者。